

第3班

〈メディア〉と〈身体〉から見る20世紀ヨーロッパの ポピュラー・カルチャー

(1) 共同研究員名

研究代表者：熊谷謙介

共同研究員：角山朋子 ステファン・ブッヘンベルゲル

客員研究員：小松原由理 田中里奈

(2) 研究目的

19世紀末から出現したとされる大衆社会において、出版や電信などのテクノロジーの発達に伴い「ポピュラー・カルチャー」が生起していく。そこにはイメージの流通という側面とともに、舞台芸術・スペクタクルに顕著な、身体の新しい表現も見られる。

これまで視覚資料から近代都市の表象分析を行ってきたが、本研究では、20世紀を中心としてメディアと身体関係を研究していく。ヨーロッパがそれまで培ってきた民衆文化は、どのように「ポピュラー・カルチャー」に受け継がれ、また変容を被ったのか、潜在的なものであるイメージと、直接的な顕現である身体は、矛盾しつつもどのように合流していくのか、ドイツとフランスを中心に考えていきたい。

これまで検討してきた絵画・版画・写真をはじめとした①図像資料とともに、舞台や映画の中で見られる②身体技法の分析も試みることで、共同研究で見過ごされがちであった観点を導入する予定である。

(3) 活動経過

2020年度

- 本年度は第五期のスタートで、研究計画としても新規性が強いものであった点、また新型コロナウイルス感染の拡大で、海外渡航が不可能であったという理由から、先行研究の分析、資料の探索に力を注いだ。
- 2020年9月1日（火）に2020年度第1回研究会を行った。2020年度の共同研究の活動方針を定めるとともに、角山朋子先生に非文字資料研究センター研究員という資格で、本研究班に所属していただくことを決定した（2020年10月28日センター研究員会議で承認。任期：2020.12.1～2023.3.31）。
- また、小松原由理客員研究員に、「世紀転換期カバレットの身体表象とジェンダー：カバレット

「11 人の死刑執行人」(Die elf Scharfrichter) と「若者文化」としてのポピュラー・カルチャー」というタイトルで、研究発表を行っていただいた。ドイツのカバレット(文学芸術キャバレー)を、若者文化、ジェンダー、同時代の舞踊の運動との関連、ポスターなどの視覚文化とのかかわりから多面的に論じるもので、これから共同研究で開拓していく領域(地域・芸術分野・社会的視点等)を示すものとなった。

- 研究班メンバーの中で共同執筆し、『非文字資料研究』に論文を投稿する企画が持ち上がった。2021 年度での出版を目指す。
- 2020 年度は海外での資料調査が全く行えず、資料の入手も遅れてしまい、班予算をほとんど執行することができなかった。しかし、今後調査・入手すべき資料の確定作業を行うことで、来年度以降、研究活動をスムーズに行うための準備ができたように思う。

2021 年度

- 本年度も新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、海外渡航が不可能であったという理由から、先行研究の分析、資料の探索、また個人の研究発表に力を注いだ。
- 2021 年 9 月 7 日(火)に 2021 年度第 1 回研究会を行った。角山朋子研究員が「第一次世界大戦下のデザインとジェンダー——ウィーン工房女性メンバーによるモード製品からの考察」というタイトルで発表をし、議論を行った。20 世紀初頭、ウィーン工房には女性デザイナーが多く活動を行ってきたが、その意義が、モードや第一次世界大戦中の状況、ウィーン・ナショナリズムの観点から論じられた。本研究グループの身体とジェンダーという問題に直結するテーマで、モードというトピックの重要性が浮かび上がると同時に、とりわけ分離派との関連やアヴァンギャルド運動におけるジェンダー表象・モードとの比較をめぐって議論された。
- 2021 年 9 月 14 日(火)に 2021 年度第 2 回研究会を行った。文学キャバレー「シャ・ノワール」の専門家である岡本夢子(日本学術振興会特別研究員 PD)氏を招き、「文学・芸術の発信地としてのキャバレー Le Chat Noir」というタイトルで、講演をしていただいた。最初に Le Chat Noir の文学場を確認し、視覚芸術(新聞の挿絵、店内装飾)や音楽(楽譜、シャンソン)も含み込んだ総合芸術的要素と、前衛芸術という既存の図式をあてはめにくい文学現象であることを確認して、新聞 Le Chat Noir の紙面構成や韜晦 fumisterie というユーモア、キャバレーで行われていた実際のパフォーマンス(影絵劇、シャンソン、即興口上、朗読)が示された。豊富な図版・動画を使って紹介され、初期の映画や漫画・アニメーションといった現代のポピュラー・カルチャーとの接続も示唆された。朗読の様態の分析も含め、非文字資料を研究する上でのアプローチの可能性も多く示された。ドイツやオーストリアにおける文学カバレットとのユーモアの特徴の相違や、理念なき前衛という特異性などが議論された。
- 小松原由理研究員の論文「モデルネからアヴァンギャルドへ：カバレット「11 人の死刑執行人」と若者たちの企て」が『非文字資料研究』24 号に掲載された(pp. 1-18)。2021 年度に研究班で発表された内容を中心としたもので、本研究プロジェクトの柱となる研究である。
- 2021 年度も海外での資料調査が全く行えず、班予算をあまり執行することができなかった。しかし、今後調査・入手すべき資料の確定作業を行うことで、来年度以降、研究活動をスムーズに

行うための準備ができた。

2022 年度

- 本年度も新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、海外渡航が難しい状況が続いたが、2022 年 8・9 月に熊谷謙介研究員がウィーンとパリに（班予算とは別の予算での出張）、2023 年 2 月に角山朋子研究員がウィーンに出張を行い（班予算での出張）、調査を進めることができた。前者においては、パリでは図書館・書店等で資料読解・収集を進めるとともに、ウィーンでは世紀転換期を中心とした美術作品や同時代のポピュラー・カルチャーを生み出した時代背景等を確認することができた。後者においては、ウィーンの美術館・図書館等で 20 世紀初頭のウィーン・デザインにおけるリズム表現に関する資料調査・収集を行った。
- 今年度は本研究の最後の年度であるが、ヨーロッパのポピュラー・カルチャーをメディアと身体という視点から検討する中で、舞台芸術や美術作品だけでなく、デザインやポスター、ファッションなど、より多様なメディアを見ていくことが必要であるという認識へと至った。次年度以降に「メディア・身体・ジェンダー」へ問題を展開させる地盤を作ることに、2022 年度は集中することに方針を決めた。
- 2023 年 3 月 29 日（水）に研究会を実施した。海外での調査の報告を行うとともに、今年度班員が行ってきた研究について知見の共有や意見交換をした上で、次年度以降の新しい研究計画について討議した。

(4) 研究成果

2020 年度

- 小松原由理「女性ダダイストの詩学：エミー・ヘニングスの文学と舞踊」『比較文学』第 63 号、2021.3、pp.81-94.
- 小松原由理「ハンナ・ヘーヒ、ダダの女性批評家、あるいは哄笑する女ダンディ？」『近代』第 122 号、2020、pp.55-66.
- 小松原由理「踊るダンディー：フーゴ・バルとラウル・ハウスマンの舞踊と仮面」『上智大学ドイツ文学論集』第 57 号、2020、pp.23-44.

2021 年度

- 小松原由理「モデルネからアヴァンギャルドへ：カバレット「11 人の死刑執行人」と若者たちの企て」『非文字資料研究』第 24 号、2022.03、pp.1-18.
- 小松原由理「ベルリン・ダダとカバレット：ラウル・ハウスマンのカバレット論をめぐって」『上智大学ドイツ文学論集』第 58 号、2021.12、pp.113-137.
- 角山朋子『ウィーン工房：帝都のブランド誕生にみるオーストリア近代デザイン運動史』彩流社、2021、430 頁（オーストリアの近代デザインを牽引したウィーン工房の活動を、作品、言説、史実から検証し、デザイン史上の意義を論じた。ウィーン工房を中心とするオーストリア

近代デザイン運動の意義は、芸術性と経済性の葛藤からの独自のデザイン様式の創出、ブランド企業の誕生、首都と国家の表象の形成に見いだせる)

- 熊谷謙介「アラベスクの詩学：マティスとマラルメ」『ユリイカ』2021年5月号、青土社、pp.241-249。(詩人マラルメと画家マティスの関係を、世紀転換期のデザインなどの領域でも重視されていたアラベスクというモチーフから論じた)
- 熊谷謙介『感情の歴史Ⅲ：19世紀末から現代まで』翻訳 (A・コルバン+J-J・クルティエヌ+G・ヴィガレロ=監修 ジャン=ジャック・クルティエヌ=編、藤原書店、2021、第6章 (pp.171-202)、第16章 (pp.433-461)、第17章 (pp.463-489)。子どもの感情と教育の関係、不安、抑鬱という感情について考察し、その表象の歴史について検討する三つの論文を翻訳した)

2022年度

- Kensuke Kumagai, “Du roman familial à la poésie familiale – Autour de Don du poème et du Tombeau d’Anatole”, “Une transparence du regard adéquat”. Mélanges en l’honneur de Bertrand Marchal, Hermann, 2023, pp.513-522. (19世紀末のフランスの詩人マラルメのジェンダー表象に関する論文)
- 熊谷謙介「神経文学論 (1)：ジャン・ロラン『フォカス氏』分析」『人文研究』(神奈川大学)、208号、2023、pp.1-42。(世紀転換期の小説『フォカス氏』をジェンダーや仮面=アイデンティティの観点から分析)
- 小松原由理他『アヴァンギャルドの運動表象』日本独文学会研究叢書149、2022 (20世紀初頭の未来派、表現主義、表現舞踊、ダダ、バウハウスを、「運動」を軸に結び合わせた論集)
- 角山朋子「フランツ・チゼックとウィーン・キネティシズム：美術工芸学校の「前衛」」『交歓するモダン：機能と装飾のポリフォニー』「機能と装飾」展実行委員会・株式会社赤々舎、pp.242-247 (英語版 pp.271-277)。(20世紀のモダン・デザインを取り上げた東京都庭園美術館展覧会図録に掲載の、1920年代初頭のウィーンの前衛的デザイン集団に関する論文)

(5) 今後の課題と展望

- 「絵画・版画・写真に見られる19世紀ヨーロッパの都市生活」というテーマ設定については、とりわけ絵画と写真を並行させて研究対象に組み入れたことにより、従来の都市表象分析に新たな視角を与えることができたように思う。
- 前衛絵画運動が次々に勃興し、リアリズムの枠組みが揺り動かされたとされる20世紀転換期においても、都市風景画・都市風俗画の伝統が存続していたことも発見であった。
- また、絵画・版画・写真のみならず、広告・ポスターやファッション・プレート、民衆版画、リトグラフ、絵葉書、新聞・雑誌・書籍に掲載される挿絵、都市風俗本・観光ガイドなど、多様な媒体との関連を探り当てたことも重要だった。
- 一方で、広場という場の表象分析は、大通りやそこを歩く都市民（とくに女性）などの表象分析

へと移行したため、十分に展開することができなかった。研究対象となる時代を 19 世紀後半～20 世紀転換期に限定したが、とりわけこの期間に、都市の人々の交流の場が、商業や祝祭の特権的な空間であった広場だけでなく、都市の各所に拡散していったことも、その原因であるように思われる。

- 都市表象分析の視点として、当初に想定していた社会史的アプローチに加えて、ジェンダー論的アプローチを導入することができた。従来、ジェンダー分析は美術史・視覚文化史研究に多く見られるようになったものの、非文字資料研究には十分に導入されてきたとは言えなかった。
- 今回の研究を継承して行われる共同研究「〈メディア〉と〈身体〉から見る 20 世紀ヨーロッパのポピュラー・カルチャー」では、こうした多様な図像資料分析や、ジェンダー論的視点を取りつつ、身体技法の分析も試みることで、非文字資料研究のアクチュアル化に寄与することを目指している。